

■ 勝利への執念 ■

名門東福岡高校のバレー部監督が41校断られ42校目で採用通知、そしてあの東海大相模が33年間も甲子園にいけなかった時期があったというのだ。名門は決して「一朝一夕」にはいかないのだ。「本気」つまり勝ちたい気持ちがどれだけあるのか、つまり「執念」が勝敗を決めると言うことだろう。大人になって経験を積むと、どうにか上手くやろうとして小手先になり、なかなか本気を出すことが出来ない自分が隣にいる。こんな記事を読んだ、門間監督が春夏甲子園連覇を出来ずに悩んでいるときに、横浜高校の渡辺監督から「春の山登りと夏の山登りは違う」と言われたそうだ。春の山登りで見た景色を眺めている時間があつたらすぐに下りなさい、そして違う山登りを始めなさいと…言葉をかけられたそうだ、なんとも奥の深い話だ。そして願望があれば自ずと知恵が出てそこから工夫が生まれるというのだ。まさに今の時代、消費者がおのおのの価値観にもとづいてじっくりと商品を選ぶようになった。だからこそ常に、スタッフと一緒にアイデアを出し、市場のニーズに適合する商品に常に変えていかなければならないのだ。私たちは「住まい」という商品を世の中に誕生させているということ強く認識しなければならぬ。コロナ禍で色々と働くスタイルが変わり「和」が薄れ「願望」が見えづらくなってきていることは間違いないだろう。だからこそ自分たちの長所をしっかりと見極め、お客様目線でそこに力を本気で注ぎ込む、ただそれだけを目指せばいいのではないか。私たちは今、コロナや自然災害と先のみえない世の中に真正面から突入している。時としてどちらに進むべきか迷うこともあるが、相手は未知の世界だ。だから間違いときずいたら直ぐに方向をただし、前へ進んでいくしか方法はないだろう。そして間違いは直せるが勘違いだけはには最善の注意が必要だ。先ず、決して今は景気等良くはないということ頭に入れて行動を慎重にしなければならない。人間は必ずどこかで間違いをおかす、後で冷静に考えれば何でこんなことをしてしまったのだろう、信じられない自分がいる。それが最も注意すべき過ちで「勘違い」だろう。わたしも見終えた景色とはさよならし、とっとと山を降り又新しい「願望という山」を見つけ、そこをめがけて皆で力を合わせ一步一步、山を登っていきたい。

遠藤孝浩

新しい暮らし方「kayanoki.village」新しい遊び方

